令和四年度　第三回例会

観世流

緑泉会

令和四年
十一月五日（土）
午後一時開演
喜多六平太記念能楽堂

「花筐」シテ 坂 真太郎（撮影 駒井壮介）

「天鼓」シテ 津村 禮次郎（撮影 吉越スタジオ）

能 Noh ……花筐 Hanagatami ……中所 宜夫

狂言 Kyougen …栗焼 Kuriyaki ……大藏 吉次郎

能 Noh ……天鼓 弄鼓之舞 Tenko Roukonomai ……桑田 貴志

令和四年度　第三回　例会　番組

能　花筐

王　新井　弘悠
侍女　石井　寛人
照日ノ前　狂女　中所　宜夫
官人　森　常好
使者　大日方　寛
奥舁　梅村　昌功
奥舁　小林　克都
後見　新井　麻衣子
後見　中森　貫太
大鼓　安福　光雄
小鼓　成田　達志
笛　竹市　学
地謡　吉留　敬高
地謡　中森　健之介
地謡　鈴木　啓吾
地謡　永島　充
地謡　藤村　答
地謡　佐久間　二郎

【休憩二十分】

狂言　栗焼

太郎冠者　大藏　吉次郎
主人　榎本　元
後見　上田　圭輔
地謡　筒井　陽子
地謡　中森　健之介
地謡　鈴木　啓吾
地謡　石井　寛人

仕舞　菊慈童　津村　禮次郎

仕舞　経正（クセ）　墨　敬子

仕舞　巻絹（キリ）　杉澤　陽子

【休憩十五分】

能　天鼓

王伯　天鼓　桑田　貴志
勅使　舘田　善博
弄鼓之舞　勅使ノ従者　大藏　教義
後見　中所　宜夫
後見　津村　禮次郎
大鼓　大倉　正之助
小鼓　大山　容子
太鼓　桜井　均
笛　槻宅　聡
地謡　筒井　陽子
地謡　新井　麻衣子
地謡　佐久間　二郎
地謡　永島　充
地謡　中森　貫太
地謡　鈴木　啓吾

附祝言

【終了予定　午後五時】

許可のない録音、撮影は一切禁止です。携帯電話は電源からお切り下さい。
演能や他のお客様の迷惑となる行為はご遠慮願います。場合によっては退場頂く事もございますのでご了承下さい。

能…花筐（はながたみ）

越前国味真野の男大迹皇子に仕える使者（ワキツレ）が、たまたま里帰りしていて、戻る途中の照日の前（前シテ）に、主人が皇位につくこととなり、急遽都に上った事を告げる。別れの文と花筐を下された照日は、悲しみを募らせ再び里へ帰ってゆく。

その年の長月（陰暦九月）、男大迹は即位して継体天皇（子方）となり、従者（ワキ）を連れて建設中の玉穂の都に行幸する。一方、照日の前（後シテ）は侍女（ツレ）と二人、狂女となって都を目指す。都への道を旅人に尋ねるも、物狂いを笑うばかりで教えてくれない。雁の帰る先をたよりに、都はそなたと、越の白山の麓から近江の琵琶湖を過ぎ、ついに玉穂の都に至る。折しも天皇の行幸と行き合うが、道を汚す物狂いと払い退けられた拍子に、皇子にもらった花筐を打ち落されてしまう。それを契機に狂乱の舞となる。「尊い花筐を土に落すとは何て恐ろしいことか。私のように狂気となって人に笑われ給うなよ。花筐を改めて見れば、二人でなした毎朝の勤めが思い出されて懐かしく恋しい。筐を『かつみ』とも言うように、かいま見た人に恋をして、それが今は帝となってしまい、月を望む猿のように及ばぬ身と泣き伏すのです。」この舞を聞き帝は狂女を近くに呼び寄せる。狂女は続いて李夫人の曲舞を舞う。「最愛の李夫人に先立たれた漢王は、招魂の儀式を行った。一瞬現れた面影は虚しく消え、かえって悲しみは募り、泣き伏した。」

最後に帝は花筐を確かめ、狂女を照日と認めて、共に玉穂の都へ帰って行く。

狂言…栗焼（くりやき）

四十個の栗をもらった主人（アド）は、太郎冠者（シテ）に栗を焼くよう命じるが、太郎冠者はこれを全部食べてしまう。さて、言い訳は竈の神夫婦とその三十四人の子どもへの進上とでっちあげたが、まだ四つ足りない…。

仕舞…菊慈童（きくじどう）

観音経の偈文と仙境の菊の露の功徳で、七百歳を重ねた慈童が、菊の花の咲き乱れるなか舞い戯れ、帝にも七百歳を授ける。

仕舞…経正（クセ）（つねまさ）

生前下賜されていた琵琶の名器青山を手にした、平家の公達経正の幽霊。その演奏を舞で表現するクセ舞の名曲。

仕舞…巻絹（キリ）（まきぎぬ）

巻絹を熊野へ届けるのに遅参して咎められる男を、巫女に憑いた神が助けた。キリの舞では、巫女自ら神上げのために数々の如来や神を言挙げしてゆき、最後は本性に戻る。

能…天鼓　弄鼓之舞（てんころうこのまい）

冒頭、中国後漢の帝の臣下（ワキ）が登場して、天鼓の物語を語る。天の鼓が胎内に宿る夢より生まれた天鼓。後に本当の鼓が天より降り下り、天鼓がこれを打つと聞く人に感動を与えた。帝はその鼓を召し上げようとしたが、天鼓が惜しんだので、捕えて呂水に沈め、鼓を宮中に召し上げた。しかしこの鼓、誰が打っても音が出ない。主の別れを悲しむのかと思い、天鼓の父に打たせようという勅定により、臣下は父王伯（前シテ）を召し出す。子を失った悲しみと、詔勅の理不尽さに困惑しつつも、宮殿まで来た王伯だったが、壮麗さに威圧されて足がすくむ。もし鳴れば、それこそが親子のしるしと、臣下に励まされて鼓に向かうが、石礫（いしころ）の如き身は、龍なる帝の前に卑小さが際立つばかり。親子の縁は一世限りだからこそ、絆となる思いは強く、苦しみも深い。その執着ゆえ成仏出来ない身には、恨みが募るばかりだ。また早く打てと催促されて、王伯はついに一打を打つ。妙音が響き渡り、老父は泣き伏し、帝も涙を浮かめる。

臣下は従者（間狂言）に命じて、老父を送り届け、管弦講の支度を整える。

天鼓を沈めた呂水の堤で管弦講をなしていると、夜になって天鼓の幽霊（後シテ）が現れる。手向けの舞楽を喜んで舞い戯れる天鼓の舞は、小書「弄鼓之舞」により、より軽快に興趣に富んだ演出となる。盛んに太鼓を打ちつつ、夜明けとともに一夜の夢は消え失せる。

2022.
11.5（土）PM1:00（開場 12:00）
喜多六平太記念能楽堂

〒141-0021 品川区上大崎 4-6-9
☎ 03-3491-8813
JR、東急目黒線、地下鉄三田線・南北線の目黒駅西口より徒歩 7 分
香港園手前の道を左折し約 400m 直進、杉野学園体育館手前を左に入る。
※駐車場がございませんので、お車でのご来場はご遠慮下さい。

入場料

会員券（年4回）	一般 20,000円	学生 10,000円
1回券（当日券）	一般 6,000円	学生 3,000円

申込先：各出演能楽師または緑泉会まで

中所　宜夫　TEL&FAX　042-550-4295
桑田　貴志　TEL&FAX　03-3643-0891

令和4年度 第4回例会 2023年1月22日（日）

能…巻絹 Makiginu …… 鈴木 啓吾
能…國栖 Kuzu …… 坂 真太郎